

本学の保健学研究科は、地域・生活向上支援学領域、健康増進・障害予防学領域及び保健学教育・組織マネジメント領域の3つの領域からなっています。大学院ではそれぞれの領域を横断した授業を取り入れています。その学びの上になって、それぞれの領域では、専門性をもった幅広い研究を行っています。開学して8年目になりました。今後さらに、保健学での学際的な研究を発展させて、社会に求められる人材を養成してゆきたいと考えています。学びやすい環境となっていますので、ぜひ一緒に研究をやってみませんか。

広島都市学園大学大学院

保健学研究科長

藤村 昌彦

広島都市学園大学大学院は、建学の精神及び教育理念に則り、学術の基盤的研究を推進しその深奥を究めるとともに、高度な専門的知識・技術が求められる高度医療専門職業人及び医療教育・研究者を育成することにより、医療の更なる発展と医療教育の質の向上に寄与することを目的とする。

養成する人材

本研究科は、“心技一体”という本学建学の精神に則り、保健、医療、及び福祉の専門分野において、高い倫理観と豊かな人間性を備え、卓越した専門性と実践能力、並びに先駆的な研究能力を有し、自身の職域においてリーダーシップを発揮することができる人材を養成することを目的とします。

- ❶研究者、教育者、又は高度の専門職業人として保健学関連領域における研究課題を発見し、分析・評価し、科学的根拠を探求して新たなケア技術やシステムを創出できる研究力を養成する。

❷地域社会での質の高いケアの提供のため、自身がリーダーシップをとり、異なった専門的背景をもつ専門職と、同じ目標に向けて連携していくためのファシリテーション能力を養成する。

❸保健学の専門的な学術理論と実践の融合を図り、社会に対して新たな知見を提案できる能力を養成する。

修了後の進路

- ❶実践の場での高度な専門職業人

現在、保健、医療、福祉の連携に伴い、医療施設のみならず研究機関、福祉施設及び行政機関等多岐にわたり、その専門領域における高度な実践者として広い視野に立って、専門知識・技術に基づいた指導と助言を行うことができる人材が強く求められている。本研究科修了生の多くは臨床実践施設に就職して、より良い実践を行い、将来的には部門のリーダーとして後輩教育、学生指導に活躍することが期待できる。
- ❷教育・研究者

本研究科修了生は、高度な専門知識・技術に関する教育を受け、教育・研究に必要な能力を修得しているため、大学、短期大学、専門学校等の教育と研究機関及び企業の研究所等での教育・研究者となることが可能である。
- ❸博士課程への進学

本研究科修了生は、高度な研究能力を修得して、研究と教育を行う大学・大学院の教育・研究者になるため博士課程への進学が可能となる。博士課程修了後には、研究機関、行政機関の管理者として活躍する可能性が開かれる。また、将来の大学等教育機関での教育・研究の前段階として修士課程で学び、臨床実践に反映をしたのち、再び博士課程で学ぶことも想定される。本研究科修了生にとっても、実践に基づいた理論・展開ができることから有益な進路選択肢の一つといえる。

社会人のための授業時間の配慮

履修時間の配慮	社会人は、仕事の両立を図れるように、指導教員と相談の上、平日の夜間や土曜日にも授業を行い、また特定の期間等に集中的な開講や教育・研究指導を実施して履修の配慮を行います。
長期履修制度	職業をお持ちか相当の理由がある場合、履修期間を1年単位で延長することができます。ただし、入学試験に合格してから、入学後1年以内の申請を必要としますので、2年次になってからの申請はできません。このときの学納金総額は、通常の2年間の学納金総額と同じです。延長期間を含めた年数で分納していただきます。ご相談ください。休学の場合、この期間の在籍料等は発生しませんが、研究指導等は受けられません。

領域の概要及び指導教員

領域	概要・指導内容	指導教員
地域・生活向上支援学領域	地域看護・リハビリテーション学分野を設け、各年代層における安全安心な在宅生活の支援を中心に研究展開を行う。また、地域の中で医療的ケアを必要とする人とその家族を支援するために必要となる高度な専門的知識・技術について学修する。	教 授 原田 耕志 教 授 ボンジェ ペイター 教 授 木下 恵美子 准教授 平松 哲哉
健康増進・障害予防学領域	病気をもつ人をつくらない、高齢者の健康寿命の延伸と生活の質の向上の実践を図るために、一次予防(健康増進など)・二次予防(早期発見など)を推進しうる学問分野を設け、研究展開を行う。	教 授 藤村 昌彦 教 授 伊藤 祥史 教 授 甲田 宗嗣 教 授 矢野 美紀 教 授 馬屋原康高 准教授 平尾 文 准教授 上川 紀道
保健学教育・組織マネジメント領域	専門職の実践能力を高めるような人材育成を幅広い視点から研究する保健学教育と、人材を最大限活かすための組織・機能等のマネジメントを研究対象とする組織マネジメントを一つの領域とし、一連の教育及び研究を展開する。	教 授 平岩 和美 教 授 酒井 知恵子

指導教員／研究分野の内容

領域	指導教員	指導内容	主な研究キーワード/連絡先
地域・生活向上支援学領域	原田 耕志 教授 博士(歯学) 歯科医師(がん治療認定医、口腔外科学会専門医・指導医、口腔科学会専門医・指導医)	広島県産農産品の有効成分を用いた創業やヘルスケア製品の開発、網羅的細菌叢解析による疾患特異的な口腔・腸内細菌の同定と新規診断法の開発、唾液腺マッサージ器・涙腺マッサージ器の開発、新規表面麻酔剤の開発、新規口腔内貼付剤の開発、熟成ニンニク抽出液が有する新規作用機序の解明 これらに参画して頂きながら基礎研究や臨床研究を学ぶと共に、産学連携による商品開発について指導する。	がん治療時の口内炎、トランスクリプトーム、マイクロバイオーーム、ネットワーク解析、高速液体クロマトグラフィー、産学連携 kharada@hcu.ac.jp
	ボンジェ ペイター 教授 博士(医学) 作業療法士	人々は通常、日常的な活動(作業)を通じて自分の健康と幸福を感じるが多い。作業が作業療法の中心にあるため、作業療法や作業科学の研究 방법이作業をプロセスとして理解する知識を生み出すことを重要とする。当事者・クライアントの日常生活の特異性や健康と幸福を考慮し、第一人称の視点から社会的条件(インクルージョン)までを対象に研究を行う。	作業科学、当事者の経験(特に、生活の取り戻すプロセス)、作業の力、質的研究(特に、Narrative-In-Action)、多職種間連携の教育学習 bontje@hcu.ac.jp
	木下 恵美子 教授 博士(薬学) 薬剤師	細胞の生命活動に重要なタンパク質のはたらき、特にタンパク質のリン酸化反応について研究している。タンパク質リン酸化酵素の異常は増殖シグナルに異常をきたし多くのがんの原因となる。現在開発されている抗がん剤の多くがリン酸化酵素を抑える分子標的薬であることから、リン酸化反応研究の重要性がわかる。このようなタンパク質研究を中心に生化学に関する研究を指導する。	リン酸化タンパク質、Phos-tag、抗生物質、遺伝子変異 kinoshita@hcu.ac.jp
	平松 哲哉 准教授 博士(保健学) 認定言語聴覚士(失語・高次脳機能障害領域、摂食嚥下障害領域)	加齢に伴う嚥下機能の低下や摂食嚥下障害に対する対応は、地域で健康的な生活を維持するために極めて重要である。これらの問題は、窒息や誤嚥の予防にとどまらず、栄養面にも直接影響を与えるため、早期の対応が必要である。また、発声や発語といったコミュニケーション面にも課題が生じることも多い。摂食嚥下機能やコミュニケーション機能の改善、適切な解決策について教授・指導を行う。	摂食嚥下障害、疲労、嚥下反射 t-hiramatsu@hcu.ac.jp

領域	指導教員	指導内容	主な研究キーワード/連絡先
健康増進・障害予防学領域	藤村 昌彦 教授 博士(保健学) 理学療法士	疾病の発生・経過・分布・消長とそれに影響をおよぼす原因を研究し、疾病の予防を行うことや、病気になりにくい心身の健康増進を図るための学問を修める。具体的には筋骨格系傷害の発生環境を模倣的に設定、データ収集、そして研究論文を完成させる。	産業衛生、筋電図、傷害予防、健康増進 masafuji@hcu.ac.jp
	伊藤 祥史 教授 博士(生命システム科学) 理学療法士	自律神経は脳と密接に関係して、循環・呼吸・消化・分泌・排泄・体温調節などホメオスタシスの維持に重要な役割を果たしている。音や音楽によって身体への影響を評価解析し、健康増進や障害予防に応用できるか研究を行う。	自律神経、ハイレゾ音、音楽療法、運動療法 s.ito@hcu.ac.jp
	甲田 宗嗣 教授 博士(保健学) 理学療法士	疾病にともなう障害重度化のメカニズムを明らかにし、障害の評価方法を開発する研究、理学療法などの介入による障害の重度化予防と治療に関する研究、また、重度化予防を担う病院や地域の組織作り、人材育成に関する研究を行う。	障害の評価、障害の重度化予防と治療、理学療法 kota@hcu.ac.jp
	矢野 美紀 教授 博士(文学) 助産師 保健師、看護師	母親の育児ストレス評価(生理的指標による測定)・分析、さらにはメカニズムの解明やマインドフルネスによるストレス緩和方法を探索する。多様化が進む社会における医療の課題を多面的に捉え、周産期(母性看護学・助産学)における課題に取り組むことができる。最新の知見や技術を取り入れ、様々なデータ解析からエビデンスを創出し実践に応用する能力を育成する。	育児ストレス、育児行動、愛着形成、マインドフルネス、周産期、教材開発 yano@hcu.ac.jp
	馬屋原 康高 教授 博士(工学) 理学療法士	様々な生体反応を解析することで、より簡便で精度の高い身体機能の測定方法や新しい疾病・障がいの予測システムを開発する。さらに、開発したシステムをウェアラブル端末や携帯端末に実装し、臨床や地域の健康増進支援に応用する。	人間工学、生体医工学、呼吸理学療法学、小児期発症疾患の障がい予防 uma@hcu.ac.jp
保健学教育・組織マネジメント領域	平尾 文 准教授 博士(医学) 作業療法士	食事は、全ての人が毎日繰り返し行う日常生活の一場面である。この食事をするなかでも「しっかり噛む」ことが重要である。ではなぜ「噛む」ことが重要なのかについて、咬合力(噛む力)や身体機能および認知機能の面から研究し、紐解いていく。	咬合力・身体機能・認知機能・高齢者・幼児 aya.72710@hcu.ac.jp
	上川 紀道 准教授 博士(保健学) 理学療法士	各身体機能が健康増進や障害予防に与える影響について明らかにするために、呼吸、姿勢、動作、睡眠、環境因子などから多角的に検討していく。よって、研究対象は健康若年者、高齢者、有疾患患者、スポーツ選手まで多岐にわたり、それぞれの原因や課題を改善するための方法や日々の取り組みについて研究を行う。	スポーツ、健康増進、高齢者、筋萎縮性側索硬化症、呼吸筋力、咳嗽、骨盤傾斜角度、睡眠の質 kamikawa@365.hcu.ac.jp
	平岩 和美 教授 博士(マネジメント) 専門理学療法士(支援工学、地域、予防)	現在の医療介護現場の管理者および管理者を目指すひとに向けた組織運営の視点を提供します。現場を詳細に観察する手法と多分野から俯瞰する力を養います。組織マネジメントと政策分析により地域における医療福祉に関わる諸問題を解決するための研究を行います。組織行動論や経営学、政策学など他分野の概念を応用することで、医療現場や地域生活において生じた課題の解決を導きます。	地域社会、連携、マネジメント、組織関係、組織行動、地域包括ケア、認知症、ダブルケア、就労支援 hraiwa@hcu.ac.jp
保健学教育・組織マネジメント領域	酒井 知恵子 教授 博士(保健学) 看護師 糖尿病療養指導士	2型糖尿病治療の基本は、食事療法と運動療法である。患者は、甘味嗜好が強く食事療法の達成が難しい。また、筋力低下や運動意欲の低減により運動療法への取組が困難な場合がある。今までの検討から食事療法と運動療法の両立法として、味覚に着目している。糖尿病の病態改善に向けた研究と実践を推進しています。みなさんの疑問、解明に向けて共に探求していきたい。	成人看護学、2型糖尿病、食嗜好、味覚 c_sakai@hcu.ac.jp

- 入学希望者は出願にあたり、研究指導を希望する教員と事前に入学後の研究等について相談したうえで出願をしてください。事前相談は、各教員に直接、連絡をしてください。連絡先のメールアドレスは、本学のホームページ(大学院教員紹介)または、「大学院学生募集要項」にも掲載しています。